

学歴社会がもたらす倫理規範への影響の検証

リスク工学専攻 2011年グループ演習

4班 森竜一 林恵子 袁新堯

(アドバイザー教員：掛谷英紀)

1. 研究背景と目的

学歴社会とは学歴によって社会的地位や評価が定まる社会のことをいう。そのため民間企業の幹部や、官僚、政治家などは比較的偏差値が高い大学の出身者が多数いる傾向がある。特に近年は受験勉強が低年齢化しているなど、早い時期から勉強を強いられるようになっており、学歴社会はもはや当たり前のようになっている。しかし、本当に学歴によって社会的地位を定める社会が良い社会なのだろうか。そこに疑問符をうつ事例の一つが東日本大震災である。

3月11日の東日本大震災の後、メディアでは現地のようにさまざまな報道がなされた。被災地においては、必死の救助作業をおこなう自衛隊の方々や、避難所において助け合いの生活を送る人の様子が報道された。一方で首都圏においては不誠実な対応を続ける企業の幹部や、自らの保身に走る政治家・官僚の姿が報道された。このように必ずしも学歴が高い人が社会全体の利益になるような行動をとっているとは限らない。

一般的に知性とモラルの関係としてはコーンバーグのモデルが知られている¹⁾。これは知性の上昇がモラル上昇の必要条件であるといったモデルである。しかしながら上記の例をみると、必ずしも知性とモラルには正相関はなく、むしろ学歴が高い人の

間でモラルの低下がみられるように見受けられる。

モラルに関する先行研究としては鈴木ら(2006)²⁾の研究や、戸田ら(2007)³⁾の研究がある。鈴木らは筑波大生の不正行為の実態を調べ、日頃から不正行為を行っている人ほど監視カメラの設置に反対する傾向があるということを明らかにした。また戸田らは大学生の社会的迷惑行動の認知と行動頻度の関係を調べ、社会的迷惑行動の促進・抑制要因を検討した。しかしながら学歴とモラルの関係を調査したものはみうけられない。

そこで本研究では大学生を対象とし、学歴とモラルの関係を明らかにすることを通して、学歴社会に警鐘を鳴らし真に良い社会作りのための一助となることを目的とする。さらに学歴以外にモラルに影響を与える要因についても同時に探ることとする。

2. 調査方法

調査方法はアンケート調査である。対象者としては全国の大学生を対象としており、学歴がばらけるように低偏差値の大学から高偏差値の大学までまんべんなく抽出した。アンケートは、各大学の教員に依頼して授業において実施したものと、大学の知人を通してアンケートを実施したのものがある。アンケートの内容を表1に示す。アンケー

トは大学生の日常生活における不正行為（モラル）に関することを対象とした。これらについて過去にどの程度行ったことがあるか、「全くない、ほとんどない、時々ある、頻繁にある」の4段階で回答させた。

この種のアンケートにおいては、自分が悪いことをどの程度やっているかは答えにくいいため、正直な回答を得られない可能性がある。そこで、本アンケートでは2つの工夫を凝らした。1つめの工夫は自分についてだけではなく、回答者の大学の友人についても同様の質問を行った点である。友人のことが自分のことよりも正直に答えやすいのではないかということが考えられることに加え、大学の友人であるならば偏差値が回答者に近いと推定できる。また、回答者本人に関する質問とどのようなずれがあるかについても調査・考察することも可能となる。2つめの工夫点として、アンケートでは良い行為と悪い行為を織り交ぜて質問している。良い行為に関する質問を混ぜることで、正直な回答を促す効果が期待できる。また前半に良いことに関する質問や、程度の軽い悪いことに関する質問を置くことで、回答者の精神的負担を低減できるようにしている。さらに回答者に答えやすくするために、関連した質問はまとめて配置している。例えば、アンケートの4、5、6項目はゴミに関する質問であり、17、18、19項目は公共交通機関でのモラルに関する質問である。

またモラルに関する質問のほかに、回答者本人に関する質問を実施した。質問は「性別」、「所属大学・学部・学科」、「現在所属しているor過去に1年以上所属していた部活・サークル」、「出身地」、「出身地の都会

度」、「家族構成」、「両親の最終学歴」である。これらは学歴以外にモラルに影響を与える因子を探るための項目であり、本研究ではこれらの質問とモラルに関する質問に対する回答傾向の相関についても分析を行う。

表 1 アンケートの内容

斜字は良い行動を示す

1	ボランティア活動
2	千円以上の寄付
3	献血
4	ゴミのポイ捨て
5	ゴミの分別
6	大学構内に落ちているゴミを拾いゴミ箱に捨てる
7	待ち合わせ時間に遅れる
8	授業の代返をしてもらう
9	試験でのカンニング
10	コピー&ペーストでレポートを作成し提出
11	違法ダウンロード
12	先生に年賀状を送る
13	父の日・母の日にプレゼントを贈る
14	未成年時の飲酒
15	自転車の飲酒運転
16	違法駐輪
17	電車・バスで席を譲る
18	電車・バス内での通話
19	電車・バスの不正乗車
20	万引き

3. 結果

アンケートは全部で16の大学に所属する大学生に対して実施され、756部の回答を得た。男女比は男性71%、女性29%であり、年次比は1年次14%、2年次15%、3年次21%、4年次50%であった。また父親の学歴として大卒以上が64%であった。分析として集めたデータを単純集計したのちに、モラルに関する質問の回答に対してポイントを与え、それぞれのサンプルの総合ポイントと回答者の偏差値の関連性等について、クロス表集計及びU検定によって検定を行った。なお、偏差値は「大学受験合格.COM⁴⁾」に基づいて算定している。

3.1. 単純集計

単純集計として友人のことについての質問と本人についての質問にわけて集計を行った。その結果として自身の行動よりも友人の行動の方が悪いように答えている回答が多く見られた。特に顕著だった4つの回答の傾向を図1に示す。

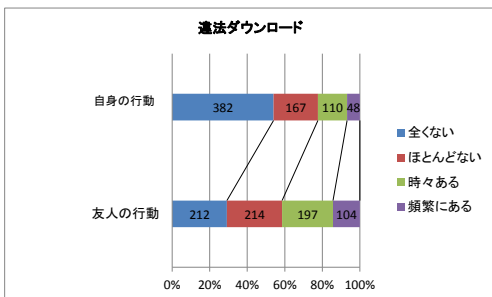
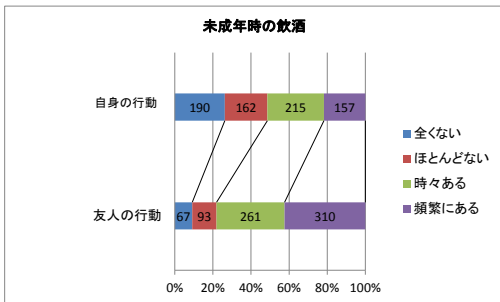
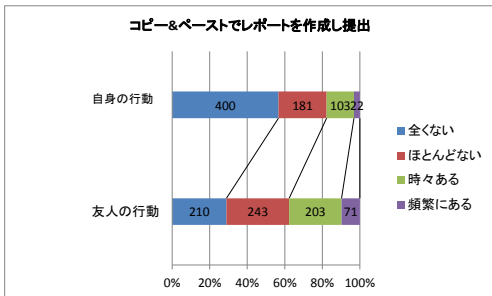
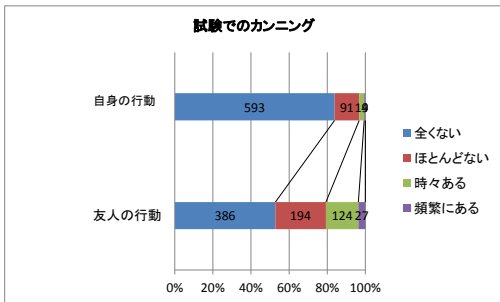


図1 友人のことを悪く言っている項目

このように、学業に関する質問において友人の行動を悪く言う傾向が見られているほか、飲酒に関する質問や、違法ダウンロードに関する質問においても友人のことを悪く言う傾向が見られた。

3.2. 分析

まず、モラルに関する質問の回答に対し、表2のようにポイント付けし、友人の行動と本人の行動それぞれの総合ポイント(以降、「友人ポイント」と「本人ポイント」と呼ぶ)を算出した。これを偏差値別に集計した結果を図2、図3に示す。

表2 ポイントのつけ方

行動	全くない	ほとんどない	時々ある	頻繁にある
良い行動	0点	1点	2点	3点
悪い行動	0点	-1点	-2点	-3点

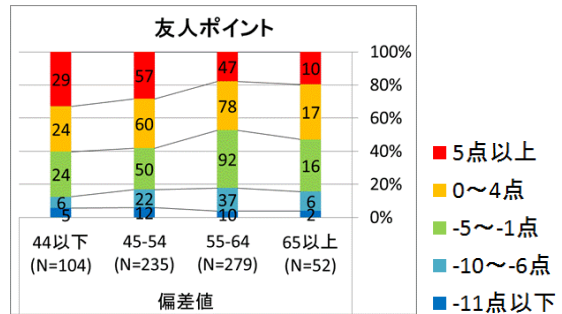


図2 偏差値別友人ポイントの集計結果

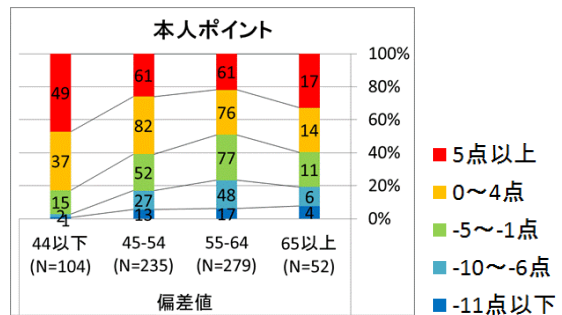
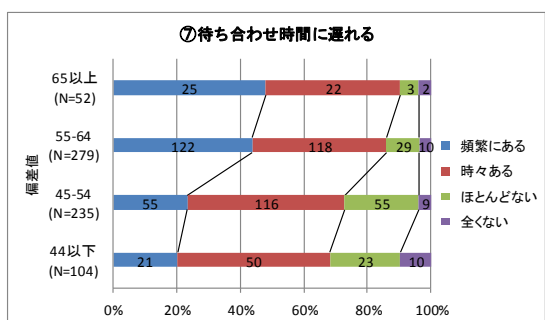


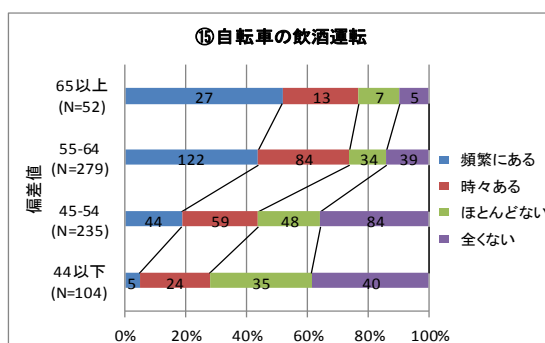
図3 偏差値別本人ポイントの集計結果

偏差値を44以下、45～54、55～64、65以上の4カテゴリに分け、友人のモラルに関する質問とのクロス集計、 χ^2 検定を行った。その結果、『待ち合わせ時間に遅れる』(図4)、『授業の代返をしてもらう』、『未成年時の飲酒』、『自転車の飲酒運転』(図5)、



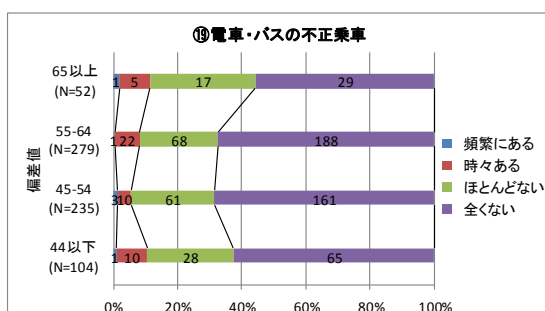
	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	51.91	9	0.001未満

図4 「待ち合わせ時間に遅れる」回答分布



	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	117.49	9	0.001未満

図5 「自転車の飲酒運転」回答分布

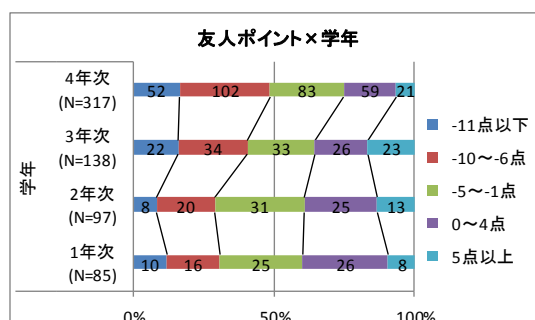


	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	8.79	9	.457

図6 「車・バスの不正乗車」回答分布

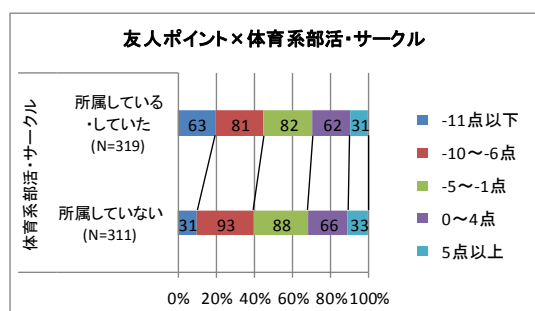
『違法駐輪』といった項目で有意な差が見られたが、『電車・バスの不正乗車』(図6)や『万引き』では有意な差は見られなかった。このことから、偏差値が高い大学の学生は、罰則がない、または見つかりにくい不正行為を頻繁に行う傾向にあるということが言える。

次に、友人ポイントを-11点以下、-10～-6点、-5～-1点、0～4点、5点以上の5カテゴリに分けモラルに関する項目以外の質問の回答とクロス集計、 χ^2 検定を行った。その結果、『学年』(図7)、『体育系部活・サークル』(図8)で有意な差が見られた。



	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	29.15	12	.004

図7 「友人ポイント×学年」分析結果



	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	12.02	4	.017

図8 「友人ポイント×体育系」分析結果

次に友人ポイントと本人ポイントを所属大学の「偏差値55以上」と「偏差値54以

下」の2カテゴリに分け(図9、図10)、それぞれについてU検定を行ったところ、友人・本人の両方で有意な差が見られた(表3、表4)。このことより、偏差値が高い大学の学生は、モラルに関する質問のポイントが友人・本人とも有意に低いといえる。(図9、10、11は便宜上、ポイントを7カテゴリに分けているが、分析ではポイントを連続量のままで扱っている。)

また、モラルに関する質問において、友人の行動よりも本人の行動を良く回答している質問項目数と、偏差値の関係(図11)についてもU検定を行ったところ、「偏差値65以上」と「偏差値64以下」に有意な差が見られた(表5)。このことから、偏差値が最も高いカテゴリの人たちは、そうでない人に比べ、友人よりも自分の行動のほうを良い方向に回答しているといえる。

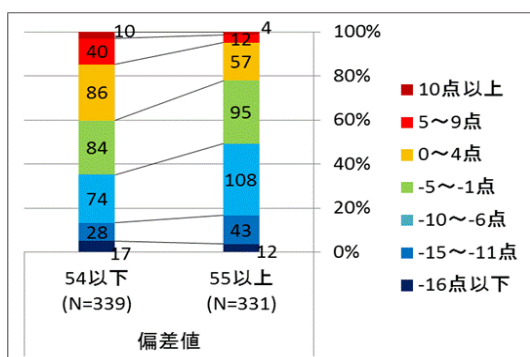


図9 偏差値別(2分類)友人ポイント

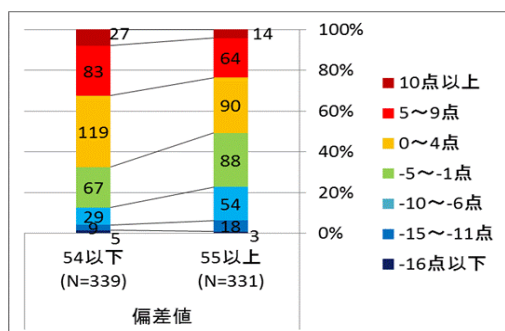


図10 偏差値別(2分類)本人ポイント

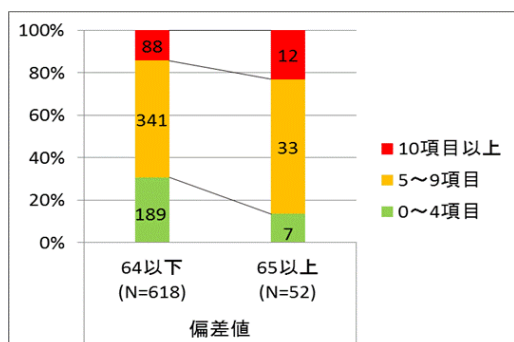


図11 友人より自分を良く回答した項目数

表3 友人ポイントのU検定

第一群:	偏差値55以上
	標本サイズ 331
	平均値 -0.50
	不偏分散 44.78
第二群:	偏差値54以下
	標本サイズ 339
	平均値 1.52
	不偏分散 39.77
マン・ホイットニーのU検定	
n1	331
n2	339
U	4.49*10 ⁴
E(U)	5.61*10 ⁴
V(U)	6.28*10 ⁶
Z	4.46
P値	8.01*10 ⁻⁶

表4 本人ポイントのU検定

第一群:	偏差値55以上
	標本サイズ 331
	平均値 -4.98
	不偏分散 38.11
第二群:	偏差値54以下
	標本サイズ 339
	平均値 -2.82
	不偏分散 49.88
マン・ホイットニーのU検定	
n1	331
n2	339
U	4.49*10 ⁴
E(U)	4.61*10 ⁴
V(U)	6.26*10 ⁶
Z	4.47
P値	7.82*10 ⁻⁶

表5 自分を良く回答した項目数のU検定

第一群:	偏差値65以上
	標本サイズ 52
	平均値 7.27
	不偏分散 7.26
第二群:	偏差値64以下
	標本サイズ 618
	平均値 6.17
	不偏分散 9.80
マン・ホイットニーのU検定	
n1	52
n2	618
U	1.26*10 ⁴
E(U)	1.61*10 ⁴
V(U)	1.78*10 ⁶
Z	2.61
P値	9.01*10 ⁻³

4. 考察

本研究の集計・分析結果から、偏差値の高い大学の学生は、大学の同級生のモラルが低いと回答していることが示された。これと同様の傾向は、回答者本人に関する質問についても見られており、以上のことは、偏差値の高い大学の学生のモラルが低いことを示唆する。

しかしながら、学歴（偏差値）以外の要因がモラルに影響を与えている可能性は否定できない。そこで、性別、部活、出身地、家族などの質問とモラルに関する質問の回答の相関を調べた。なお、これらの質問、回答者本人に関することであるので、本人ポイントのみを対象とした。その結果、偏差値以外に、性別（男）、学年、父親の学歴と本人ポイントの間にマイナス（モラル低下）の相関が有意に見られた（表6参照）。これが偏差値に関する分析のバイアスになっている可能性は否定できない

表6 本人ポイントと有意な相関をもつ項目

	Pearson の相関係数	有意確率 (両側)
男	-.230	0.001未満
偏差値	-.213	0.001未満
学年	-.172	0.001未満
父親が大卒	-.123	.003

このうち、学年については友人ポイントでも有意な差が見られている（学年については友人も同学年を想定しうる）。そこで、同学年で友人ポイントを比較したところ、2年生と3年生で偏差値が高いグループで有意にポイントが低いことが確認された。

性別については、女性割合の低い(19.2%)

偏差値44以下のグループでもポイントが高くなっており、性別とは独立に偏差値がポイントに影響していることが分かる。

5. まとめ

本研究では大学生を対象としたアンケート調査から、所属する大学の偏差値が高い（高学歴の）学生は、日常生活において不正行為をより頻繁に行っていることが示された。また全体として本人に対する回答よりも友人に対する回答においてより不正が頻繁であると回答する傾向がみられ、それは特に偏差値65以上の高偏差値において顕著であった。さらに年次が上がるにつれてモラルが低下する傾向もみられた。これらの結果は、偏差値偏重の現在の教育が人々のモラル低下をもたらしている可能性、および現在の大学におけるモラル教育の不十分さを示唆するものである。

参考文献

- 1) KOHLBERG'S STAGES OF MORAL DEVELOPMENT
<http://www.prophecyviewpoint.com/html/ocs/kohlberg.pdf> (最終閲覧日 2011/9/24)
- 2) 鈴木研悟、清水航士、染谷勝彦、掛谷英樹:「プライバシーの実態」、第2回メディア情報検証学術研究会治安防犯学ワークショップ講演論文集(2006)
- 3) 戸田まり、小林亜希子:「大学生の社会的迷惑に関する検討」、北海道教育大学紀要(教育科学編)第57巻 第2号(2007)
- 4) 大学受験合格.COM
<http://daigaku.jyuden-goukaku.com/> (最終閲覧日 2010/10/13)